

日暮遺跡

第39次調査

埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

神戸市教育委員会

日暮遺跡

第39次調査

埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

神戸市教育委員会

序

神戸市中央区の春日野道界隈は、古より海陸の交通の要衝として栄えてきた地域です。

そのような立地のなかで、この地には古代より人々の生活が営まれてきました。本書に紹介します日暮遺跡では、弥生時代の終わり頃より連綿と続く人々の暮らしの様子を窺い知ることができます。

このたび、住友ゴム工業株式会社のご協力によって敷地内の発掘調査および調査成果報告書の刊行をおこなうことができました。また、新たに建設された建物の一角に、調査の成果を展示するスペースを設けていただきました。ご厚意に深く御礼申し上げます。

本書の刊行で、この発掘調査によって得られた資料が市民の方々に広く知られ、地域の歴史への理解を深めていただく一助となることを願ってやみません。

平成28年2月

神戸市教育委員会

例　言

1. 本書は神戸市中央区筒井町2丁目29-1他に所在する日暮遺跡第39次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は住友ゴム工業株式会社神戸本社技研5号館の新築工事に伴うもので、神戸市教育委員会が同社から委託を受けて現地調査を平成26年度に実施した。また平成27年度に出土品の整理作業と報告書作成・刊行作業を実施した。
3. 本書の執筆・作成・編集は谷　正俊が担当した。
4. 遺物の写真撮影は杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。
5. 本書に用いた方位・座標は平面直角座標系世界測地系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で示した。
6. 調査で出土した遺物および写真・図面等の記録類は神戸市埋蔵文化財センターにて保管している。
7. 本書に使用した地図は国土地理院発行の1/25000地形図「神戸首部」、神戸市発行の1/2500地形図「新神戸駅」「王子」である。
8. 調査および報告書の刊行にあたって、住友ゴム工業株式会社の協力を得ました。

目 次

序

例言

目次

I. はじめに

- | | |
|-------------------------|-----|
| 1. 日暮遺跡の立地と歴史的環境 ······ | 1 頁 |
| 2. これまでの調査成果 ······ | 5 頁 |
| 3. 第39次調査の経緯と経過 ······ | 7 頁 |

II. 遺構と遺物

- | | |
|-----------------|------|
| 1. 遺構 ······ | 9 頁 |
| 2. 遺物 ······ | 19 頁 |
| III. まとめ ······ | 22 頁 |

挿図・挿図写真・表目次

- | | |
|---|---------|
| fig. 1 調査地位置図 ······ | 1 頁 |
| fig. 2 日暮遺跡と周辺の遺跡 ······ | 3 頁 |
| fig. 3 日暮遺跡既往の調査一覧表 ······ | 5 頁 |
| fig. 4 調査区配置図 ······ | 8 頁 |
| fig. 5 現地説明会の状況（1・写真） ······ | 8 頁 |
| fig. 6 現地説明会の状況（2・写真） ······ | 8 頁 |
| fig. 7 基本層序図（調査区南西壁） ······ | 9 頁 |
| fig. 8 A区南壁（写真） ······ | 9 頁 |
| fig. 9 埋葬坑の状況（東から・写真） ······ | 10 頁 |
| fig. 10 埋葬坑の状況（北から・写真） ······ | 10 頁 |
| fig. 11 埋葬坑切り取り作業（1・写真）（周囲の土を取り除く） ······ | 10 頁 |
| fig. 12 埋葬坑切り取り作業（2・写真）（ウレタンで被覆する） ······ | 10 頁 |
| fig. 13 焼夷弾検出状況（1・写真） ······ | 10 頁 |
| fig. 14 焼夷弾検出状況（2・写真） ······ | 10 頁 |
| fig. 15 人力掘削作業の状況（写真） ······ | 11 頁 |
| fig. 16 A区第1 遺構面平面図 ······ | 11 頁 |
| fig. 17 第2 遺構面土坑・溝・不明遺構断面図 ······ | 13 頁 |
| fig. 18 第2 遺構面平・立面図 ······ | 14・15 頁 |
| fig. 19 第2 遺構面土坑・溝・不明遺構断面図 ······ | 17 頁 |
| fig. 20 第2 遺構面柱列・ピット断面図 ······ | 18 頁 |
| fig. 21 遺構出土土器・陶器 ······ | 19 頁 |
| fig. 22 中世耕作土出土土器・陶器 ······ | 19 頁 |
| fig. 23 黒色混疊シルト出土土器・陶磁器 ······ | 21 頁 |
| fig. 24 調査地出土土錐 ······ | 22 頁 |

写真図版目次

写真図版1

1. A区遠景(南西から)
2. B区遠景(南から)

写真図版2

1. A区第1遺構面溝全景(南から)
2. A区第2遺構面全景(東から)

写真図版3

1. A区柱列SP218~222(北から)
2. A区溝SD201全景(南西から)

写真図版4

1. B区第2遺構面全景(西から)
2. B区第2遺構面全景(東から)

写真図版5

1. 中世耕作土出土土器・陶器
2. 遺構出土土器(1)
3. 遺構出土土器(2)
4. 遺構出土土器・陶器

写真図版6

1. 黒色混疊シルト出土土器・陶磁器

写真図版7

1. 黒色混疊シルト出土土器
2. 調査地出土土錐

I. はじめに

1. 日暮遺跡の立地と歴史的環境

(1) 立地

日暮遺跡の立地する神戸市中央区は、市域を南北に二分する六甲山系の南麓にあり、生田川等の中小河川によって形成された扇状地の末端部に位置する。現在の海岸線は埋め立てによって、調査地から約800m南に位置するが、明治時代の初め頃には400m南、それ以前はより近い場所が海岸であったと推定されている。

当遺跡を含む中央区東部は明治・大正期以降、大規模な工場・事業所の開設に伴い、急速に市街地化が進み、現在は住宅・商店・工場が密集する地域となっている。

このため、付近の埋蔵文化財の状況は全く不明であったが、昭和61年に市営住宅建設に伴う試掘調査で初めて確認され、引き続き行われた発掘調査の結果、古墳時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物群を検出した（第1次調査）。

その後、住宅や店舗の新築・建て替え工事の際に調査を実施し、これまでに40回を超える調査を積み重ね、中央区日暮通・吾妻通・八雲通・東雲通・筒井町の広範囲に亘る弥生時代末から中世にかけての集落遺跡であることが明らかになってきている。

これまでの調査の中で、とりわけ古墳時代初頭～前期の竪穴建物群、奈良・平安時代の掘立柱建物群が複数見つかっており、これらの時期に集落が盛んであったことが窺える。また、これらの建物群は各時代によって、集落を形成する場所が若干の重なりはあるものの、概ね南北に分かれており、時代による土地利用の変遷が窺い知れる。

また、これまでの調査で出土した遺物の中に網漁に用いる土錘や蛸壺が多く認められることから、時代を通じて海に関わりの深い人々が居住していたことは間違いないと思われる。



fig.1 調査地位置図 S=1/5000

(2) 歴史的環境

日暮遺跡の周辺に所在する主な遺跡を時代順に記述する。

縄文時代

雲井遺跡では縄文時代早期前半の集石遺構、土坑が発見されており、付近からは大川式・神宮寺式・神並上層式とよばれる押型文土器が出土している。また縄文時代中期末の北白川C式の土器を伴う土坑、堅穴住居状の遺構が確認されている。縄文時代晩期～弥生時代前期の土坑・ピットなども検出されており、この遺跡付近に当時の人々が継続に住み続けていたものと思われる。

二宮東遺跡では早期の神並上層式の土器とともに土坑、ピット群を発見している。熊内遺跡では早期前半の堅穴住居、中期末～後期初頭の土坑等を確認した。生田遺跡では中期～後期末の堅穴住居状遺構、土坑が複数見つかり、それとともに当該期の土器、土偶、石器が多数出土している。また北陸地方から搬入されたと思われるヒスイ製の小玉を発見しており注目される。

弥生時代

雲井遺跡では弥生時代前期～中期の方形周溝墓が多数発見され、墓域が広範囲に拡がっていることが判明している。また同じ時期の堅穴住居が密集する調査地点もあり、集落と墓域が場所を違えながら同時併存していたことが窺える。後期には熊内遺跡で大規模な二重の環濠に囲まれた集落が営まれる。またJR新神戸駅北側にある布引丸山遺跡は、かつて工事の際に弥生時代中期の土器が出土したといわれるが、発掘調査は行われておらず詳細は不明である。

古墳時代

前期初め頃には日暮遺跡、熊内遺跡で集落が認められる。中期には、日暮遺跡、二宮遺跡、二宮東遺跡で集落が確認され、分散化の傾向が著しい。中期末～後期には生田遺跡、下山手遺跡、熊内遺跡で堅穴住居、掘立柱建物、土坑墓、木棺墓が発見されている。

また、割塚古墳、生田町古墳群、中宮古墳、三本松古墳等の後期古墳が生田川流域とその西側段丘上に散在していたようであるが、そのほとんどが明治～昭和の初め頃の市街地化によって消滅しており詳細は明らかでない。わずかに中宮黄金塚古墳のみが墳丘の一部と石室の大部を現在に留めている。

飛鳥時代～平安時代

二宮遺跡では飛鳥時代の掘立柱建物、堅穴住居とともに、鍛冶工作を行ったと思われる遺構・遺物が確認された。下山手遺跡でも同時期の建物群が検出されている。

奈良時代には日暮遺跡付近を古代の主幹道路である山陽道が通るようである。当遺跡では、奈良時代の掘立柱建物が複数見つかっており、山陽道との関係が注目される。また二宮遺跡、旧三宮駅構内遺跡、下山手遺跡等で同時期の遺跡が確認されている。

また、日暮遺跡の東約1km付近において『万葉集』所載の歌に「敏馬浦」と詠まれた湊の存在が指摘されているが、現在のところ実態は明らかになっていない。

平安時代では日暮遺跡で掘立柱建物群とそれに伴う地鎮遺構が複数確認されている。また、旧三宮駅構内遺跡でも井戸、土坑が検出されている。

鎌倉時代～室町時代

日暮遺跡で鎌倉時代末頃の圍池を伴う建物群が確認されている。また生田遺跡でも井戸等の遺構が確認されている。

南北朝期～室町時代には布引の滝の北西側丘陵上に滝山城が築かれる。また戦国時代には兵庫県庁のあたりに花隈城が設けられる。これらはまだ調査が充分行われておらず、不明な点が多い。

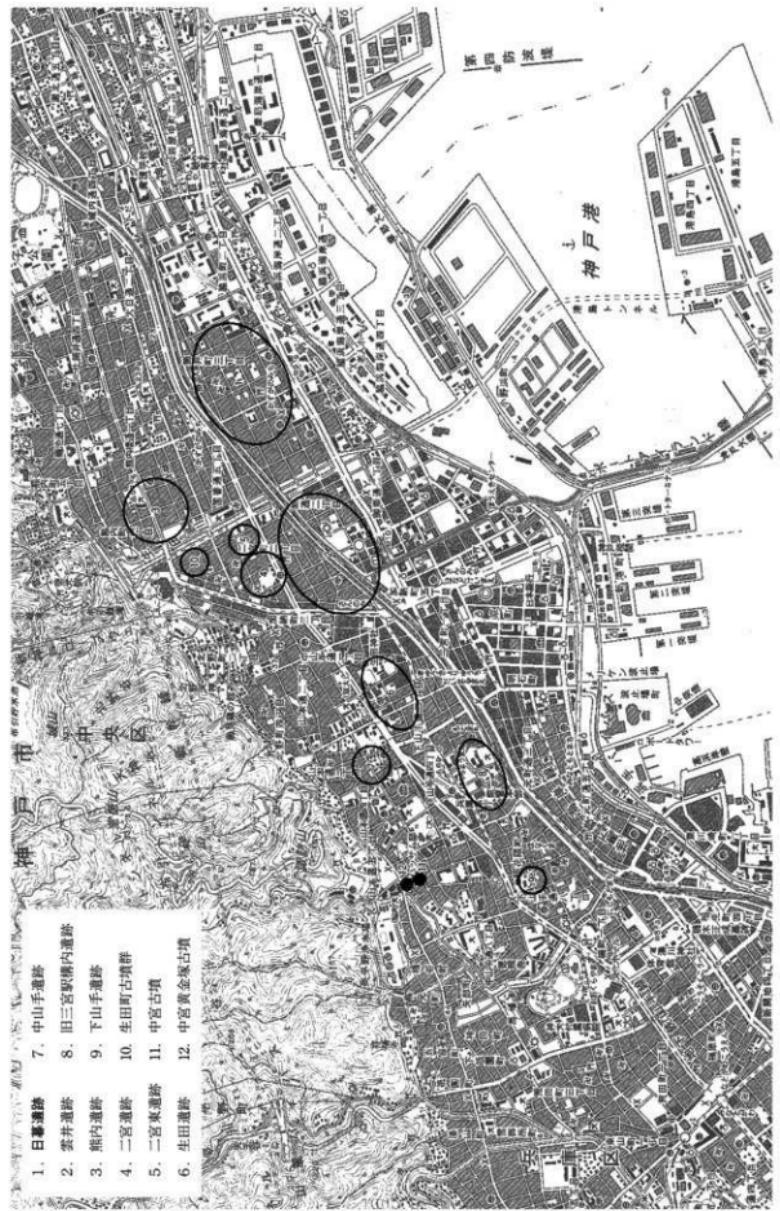


fig.2 日暮道路と周辺の道路 S=1/25000

参考文献（番号はfig.2の番号と一致）

1 日暮遺跡

- 谷 正俊「日暮遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1989
兼康保明他「日暮遺跡第11次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1998
西岡巧次「日暮遺跡第20次調査」「平成13年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2004
内藤俊哉「日暮遺跡第31次調査」「平成19年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2010
阿部 功「日暮遺跡第33次調査」「平成20年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2011

2 雲井遺跡

- 丹治康明「雲井遺跡第1次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1991
安田 澄「雲井遺跡第4次調査」「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」1994
西岡巧次・福島孝行「雲井遺跡（第8次調査）－震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査概要－」
神戸市教育委員会 1998

山口英正「雲井遺跡 第20次調査 発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2006

西岡誠司・川上厚志「平成20年度 雲井遺跡第28次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2010

川上厚志「平成22年度 雲井遺跡第33次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2010

口野博史「雲井遺跡第32次調査」「平成22年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2013

3 熊内遺跡

- 丸山 潔・松林宏典「熊内遺跡」「平成元年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1992
安田 澄編「熊内遺跡第3次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2003

4 二宮遺跡

- 谷 正俊「二宮遺跡 第1次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2001
石島三和「二宮遺跡発掘調査報告書－第2次調査－」神戸市教育委員会 2003

5 二宮東遺跡

- 浅谷誠吾「二宮東遺跡第3次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2010

6 生田遺跡

- 丸山 潔「生田遺跡」「昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1990
中谷 正「生田遺跡第4次発掘調査概要－中山手地区再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－」
神戸市教育委員会 2006

7 中山手遺跡

- 木戸雅寿他「中山手遺跡 第2次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2000
平田博幸他「中山手遺跡」「平成10年度年報」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1999

8 旧三宮駅構内遺跡

- 菅本宏明他「旧三宮駅構内遺跡」「平成2年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1993

9 下山手遺跡

- 阿部敬生「下山手遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2014

10 生田町古墳群

- 木村次雄・小林行雄「釧子発見の神戸市生田町古墳群」「考古学雑誌」20-6 考古学会 1930
谷 正俊「生田町古墳群第1次調査」「平成12年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2003

11 中宮古墳

- 梅原末治「神戸中宮古墳とその遺物」「古墳址記」 1926

12 中宮黄金塚古墳

- 菅本宏明「中宮黄金塚古墳」「昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1994

2. これまでの調査成果

これまでの調査の要点を下記一覧表にて列記する。

調査 次数	調査 年度	調査地住所	調査機関	調査 面積	時代・主要遺構等	文献
1	1986	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	730	古墳時代：堅穴住居 平安時代：掘立柱建物	1
2	1989	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	530	古墳時代～飛鳥時代：掘立柱建物 奈良時代～中世：ビット・溝	2
3	1991	東雲通1丁目	淡神文化財協会	536	古墳時代前期：堅穴住居	3
4	1991	東雲通1丁目	神戸市教育委員会	350	弥生時代末～古墳時代中期：堅穴住居・土坑・ビット 平安時代～鎌倉時代：ビット	3
5	1993	東雲通1丁目	神戸市教育委員会	190	古墳時代前期：堅穴住居・土坑・ビット・集積遺構	4
6	1994	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	390	平安時代：掘立柱建物・ビット	5
7	1994	筒井町3丁目	関西文化財協会	520	古墳時代：堅穴住居 平安時代：土坑	—
8	1995	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	82	近世以降の溝・土坑	6
9	1995	日暮通2丁目	神戸市教育委員会	470	平安時代前期～後期：溝	6
10	1995	脇浜町3丁目	神戸市教育委員会	775	奈良時代：掘立柱建物・欄・溝	6
11	1995	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	94	飛鳥時代：溝・ビット・土坑	6
12	1995	筒井町1丁目	神戸市教育委員会	800	古墳時代：溝 中世：溝・落ち込み	6
13	1996	吾妻通1丁目	神戸市教育委員会	200	古墳時代：溝・ビット 奈良時代～平安時代：掘立柱建物	7
14	1997	八雲通1丁目	神戸市教育委員会	346	平安時代～室町時代：土坑・耕作痕	8
15	1999	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	370	飛鳥時代：掘立柱建物・ビット	9
16	1999	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	30	飛鳥時代～平安時代：ビット	9
17	1999	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	58	古墳時代前期：溝・土坑・土器置り 平安時代後期の牛の足跡	9
18	1999	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	56	飛鳥時代～平安時代：掘立柱建物・ビット	9
19	2000	東雲通1丁目	神戸市教育委員会	152	平安時代～鎌倉時代：溝・ビット 室町時代：溝・土坑・ビット	10
20	2001	東雲通1丁目	神戸市教育委員会	121	弥生時代末～古墳時代前期：堅穴住居 鎌倉時代～室町時代：掘立柱建物	11
21	2003	脇浜町3丁目	神戸市教育委員会	270	弥生時代後期～古墳時代初期：土坑 飛鳥時代：溝・土坑・落ち込み	12
22	2004	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	60	奈良時代：溝・ビット	13
23	2004	八雲通1丁目	神戸市教育委員会	20	鎌倉時代前半：土坑・落ち込み	13
24	2005	東雲通1丁目	神戸市教育委員会	15	古墳時代前期：土坑・溝・ビット 平安時代～中世：土坑・溝・ビット	14
25	2005	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	13	平安時代：溝・ビット	14
26	2005	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	110	平安時代：溝	14
27	2005	八雲通2丁目	神戸市教育委員会	30	弥生時代後期～古墳時代初期：落ち込み・ビット	14
28	2005	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	220	室町時代～近世：溝・土坑・ビット・落ち込み	14
29	2006	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	23	鎌倉時代～室町時代：土坑・ビット	15
30	2007	八雲通2丁目	神戸市教育委員会	125	弥生時代末～古墳時代：堅穴住居・土坑 中世：土坑・ビット	16
31	2007	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	300	平安時代～中世：掘立柱建物・溝・土坑・ビット	16
32	2008	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	235	平安時代：溝・土坑・ビット 平安時代末～鎌倉時代初期：掘立柱建物・ビット	17
33	2008	八雲通3丁目	神戸市教育委員会	715	平安時代末～鎌倉時代初期：溝・土坑・ビット	18
34	2009	八雲通3丁目	神戸市教育委員会	185	平安時代末～鎌倉時代初期：溝・土坑・ビット・湿地状落ち込み	18
35	2012	日暮通2丁目	神戸市教育委員会	350	奈良時代：溝・ビット・杭列	19
36	2012	筒井町3丁目	神戸市教育委員会	6	遺物包含層	19
37	2012	日暮通1丁目	神戸市教育委員会	40	平安時代：柱穴・溝 平安時代末～中世：ビット	19
38	2012-13	東雲通1丁目	神戸市教育委員会	138	弥生時代末～古墳時代初期：堅穴住居・土坑・ビット 室町時代：溝・井戸	—
39	2014	筒井町2丁目	神戸市教育委員会	1475	古墳時代～平安時代：溝・土坑・ビット 中世：耕作溝	本著
40	2014	脇浜町3丁目	神戸市教育委員会	80	飛鳥時代～平安時代：ビット 近代：路面電車軌跡	—
41	2014	八雲通2丁目	神戸市教育委員会	438	戦国時代～江戸時代：溝・ビット	—
42	2014	八雲通2丁目	神戸市教育委員会	21	平安時代以降の土坑・落ち込み・ビット	—
43	2015	東雲通1丁目	神戸市教育委員会	130	古墳時代：堅穴住居・溝 鎌倉時代～室町時代：柱穴・土坑・溝	—

fig.3 日暮遺跡既往の調査一覧表

既往の調査参考文献

- 1 谷 正俊「日暮遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1989
- 2 丸山 謙・松林宏典「日暮遺跡」「平成元年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1992
- 3 「平成3年度埋蔵文化財発掘調査一覧表」「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1994
　山本雅和「日暮遺跡第4次調査」「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1994
- 4 井尻 格「日暮遺跡第7次調査」「平成5年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1996
- 5 東 喜代秀「日暮遺跡第6次調査」「平成5年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1997
- 6 長屋幸二・岡本泰典「日暮遺跡第10次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1998
　兼康保明他「日暮遺跡第11次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1998
　佐藤公保・岡本泰典「日暮遺跡第12次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1998
　富山直人・東 喜代秀「日暮遺跡第13次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1998
　安田 滋・橋詰清孝「日暮遺跡第14次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1998
- 7 錬田 勉・和田理啓「日暮遺跡第13次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1999
- 8 口野博史「日暮遺跡第15次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2000
- 9 谷 正俊「日暮遺跡第15次調査」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2002
　谷 正俊「日暮遺跡第16次調査」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2002
　須藤 宏「日暮遺跡第17次調査」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2002
　谷 正俊「日暮遺跡第18次調査」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2002
- 10 黒田基正「日暮遺跡第19次調査」「平成12年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2003
- 11 西岡巧次「日暮遺跡第20次調査」「平成13年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2004
- 12 石島三和「日暮遺跡第21次調査」「平成15年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2006
- 13 中居さやか「日暮遺跡第22次調査」「平成16年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2007
　山本雅和「日暮遺跡第23次調査」「平成16年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2007
- 14 「平成17年度埋蔵文化財発掘調査一覧表」「平成17年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2008
　浅谷誠吾「日暮遺跡第28次調査」「平成17年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2008
- 15 浅谷誠吾「日暮遺跡第29次調査」「平成19年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2009
- 16 内藤俊哉「日暮遺跡第30次調査」「平成19年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2010
　内藤俊哉「日暮遺跡第31次調査」「平成19年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2010
- 17 阿部 功「日暮遺跡第32次調査」「平成20年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2010
- 18 東 喜代秀「日暮遺跡第33・34次調査報告書」神戸市教育委員会 2010
- 19 西岡巧次「日暮遺跡第35次調査」「平成24年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2015
　「平成24年度埋蔵文化財発掘調査一覧表」「平成24年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2015
　佐藤麻子「日暮遺跡第37次調査」「平成24年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2015

3. 第39次調査の経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

住友ゴム工業株式会社神戸本社は研究棟（技研5号館）の建設を計画し、建築にあたっての諸手続きを行う段階で、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地（日暮遺跡）内に位置していたことから、平成26年2月10日付で、文化財保護法第93条第1項の規定による届出を、住友ゴム工業株式会社代表取締役社長より神戸市教育委員会教育長あてに提出した。

それを受け神戸市教育委員会は平成26年3月25日に試掘調査を実施し、その結果、埋蔵文化財が遺存していることが判明した。

試掘調査のデータに基づき、遺構の確認された深度が工事掘削予定深度よりも浅く、現状保存が不可能と判断されたため、埋蔵文化財発掘調査が必要である旨を文書で通知した。

その後、調査の具体的な方法や調査時期等の協議を経て、事業主より発掘調査依頼書が提出され、平成26年6月より現地調査を実施することとなった。

調査にあたって、現況地表面から1m前後までは埋蔵文化財に抵触しないことが、試掘調査によって判っていたため、調査前に事業者によって上記深度までの建設機械による掘削、場外処分が6月2日～13日まで行われることとなり、その工事は教育委員会文化財課職員の立会のもと、実施した。

現地の調査着手は上記作業完了後の6月16日より実施することになった。

(2) 調査組織（平成26・27年度）

現地調査および整理、報告書刊行作業にあたる神戸市教育委員会の体制は以下の通りである。

神戸市文化財保護審議会 史跡・考古担当委員

工楽普通（大阪府立狭山池博物館館長）

菱田哲郎（京都府立大学文学部教授）

神戸市教育委員会事務局

教育長 雪村新之助

社会教育部長 東野展也

文化財担当部長 安達宏二（平成26年度）

埋蔵文化財担当課長 千種 浩（平成26年度）

文化財課長 千種 浩（平成27年度）

文化財課担当係長 前田佳久（平成26年度）

埋蔵文化財係長 前田佳久（平成27年度）

埋蔵文化財センター担当係長 安田 澤

調査担当学芸員 谷 正俊・山田侑生・岡田健吾

遺物整理担当学芸員 黒田恭正

(3) 調査の経過

現地調査

現地での調査は、平成26年6月16日から平成26年8月29日まで実施した。

調査面積は約1475m²である。

調査は建築工事によって遺跡に影響が及ぶ範囲内について発掘調査を実施した。調査に伴う掘削残土の仮置き場の確保のために調査範囲の西側約2/3をA区、東側1/3をB区とし、A区より調査を始めた。

A区の調査が概ね完了した段階の7月30日には、住友ゴム工業株式会社のご協力により、社内向けの現地説明会を実施し、社員の方々120人に見学いただいた。

その翌日より掘削仮置き土を建設機械により反転させ、引き続きB区の調査を実施した。B区調査完了後、埋戻しを行い8月29日には現地の引き渡しを行った。

出土品の整理・報告書の作成

平成26年度は現地調査完了後、神戸市西区糀台6丁目所在の神戸市埋蔵文化財センターにて出土した土器類の水洗作業を実施した。

平成27年度は出土土器類のマーキング・復元作業・実測作業を上記の場所で行った。その後、遺構・遺物実測図のレイアウト・トレース作業・本文作成等を進めた。また出土遺物の写真撮影を行った。

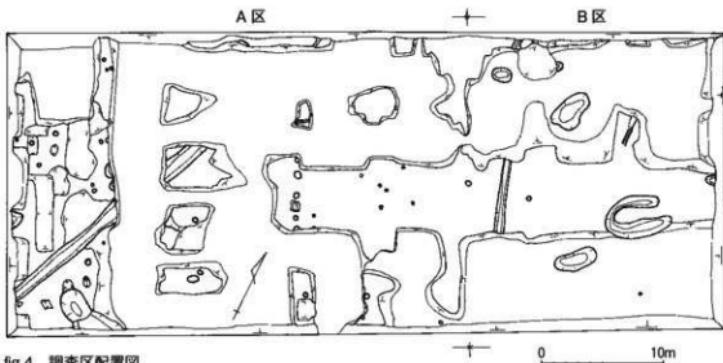


fig.4 調査区配置図



fig.5 現地説明会の状況 (1)



fig.6 現地説明会の状況 (2)

II. 遺構と遺物

1. 遺構

(1) 基本層序

当該地付近は六甲山南麓の小河川によって形成された扇状地末端に位置し、標高12m前後を測る。周辺の地形は、概ね北西から南東方向に傾斜している。

調査地には、かつて鉄筋コンクリート造の建物が存在し、その基礎工事および撤去作業時の掘削が著しく、基礎間の狭小な部分に遺物包含層および遺構面が残存していた。

上記のような状況のため、調査区の南壁・北壁の一部分で本来の堆積層が観察できるに止まった。基本的な層位は以下の通りである。

1. 近現代盛土・工事による搅乱土（ガレキ・石・レンガ等を含む）
2. 褐灰黄色細砂（近世耕作土）
3. 灰褐色細砂（中世耕作土・植物痕跡あり）
4. 暗（黒）褐灰色砂質シルト（中世耕作土・遺物包含層・上面が第1遺構面）
5. 黒色混疊シルト（古墳時代～中世遺物包含層）
6. 褐黄色混疊シルト（上面が第2遺構面・部分的に南北方向の土石流堆積が覆う）

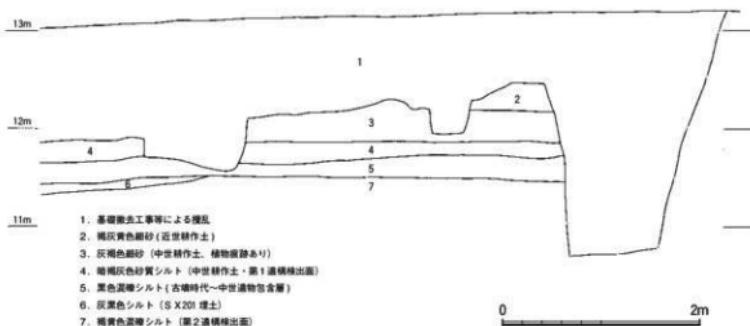


fig.7 基本層序図(調査区南西壁)



fig.8 A区南壁

(2) 検出遺構

調査の結果、中世の耕作痕（第1遺構面）、古墳時代～平安時代頃の溝・土坑・ピット等（第2遺構面）を確認した。

また、調査区東半部では近世末頃の動物（子牛・犬）の埋葬坑3基、明治・大正期の建物のレンガ積基礎・便所跡等や、太平洋戦争末期に米軍の投下した油脂焼夷弾が5本（調査区西端部で1本確認、合計6本、内3本は不発）が遺構面に突き刺さった状態で見つかった。なお、動物（子牛）の埋葬坑2基は発泡ウレタンで被覆・梱包して地面から切り離し、神戸市埋蔵文化財センターへ搬出した。



fig.9 埋葬坑の状況（東から）



fig.10 埋葬坑の状況（北から）



fig.11 埋葬坑切り取り作業（1）
(周囲の土を取り除く)



fig.12 埋葬坑切り取り作業（2）
(ウレタンで被覆する)



fig.13 焼夷弾検出状況（1）



fig.14 焼夷弾検出状況（2）

(3) 第1遺構面

基本層序の項で述べたように調査区には、以前に鉄筋コンクリート造の建物が建っており、その基礎建設および解体作業によって深く攪乱を受けていた。

西端付近の僅かに残った暗(黒)褐灰色砂質シルト(中世耕作土)上面で、南北と東西方向に延びる数条の浅い溝を確認した。これらは耕作地の排水に伴う溝の一部と考えられる。また、その周辺で浅いピットを3基検出した。



fig.15 人力掘削作業の状況

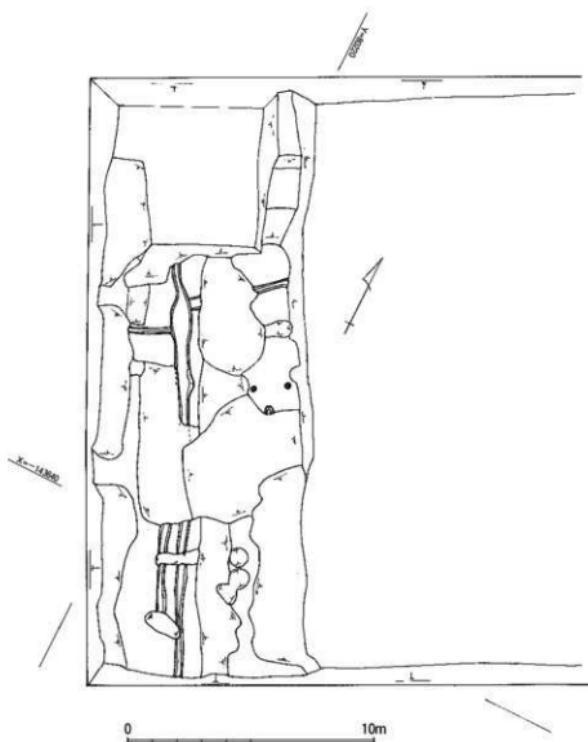


fig.16 A区第1遺構面平面図

(4) 第2遺構面

中世耕作土（暗（黒）褐灰色砂質シルト）を除去すると、黒色混疊シルトが現れる。この層には古墳時代初頭～中世頃の土器・土錐が含まれる。建物基礎間の島状に残された部分にも同様の層が残っており、北西から南東方向に下がる地形に応じて厚く（最大50～60cm）なっている。土質および堆積状況から判断してこの層は湿地状地形の環境下で堆積したものと判断される。

黒色混疊シルトを除去すると褐黄色混疊シルトが現れ、その上面で遺構を検出している。また、この遺構面では上層（黒色混疊シルト）から踏み込まれたと見られる隙踏類（ウシと思われる）の足跡が多数確認される部分があった。

以下、検出遺構について記述するが各遺構から出土した遺物は細片が多く、掘削・埋没した時代を特定できる遺物が出土したものは明記している。遺物が出土しなかったもしくは、細片で時代が判然としないものは概ね、古墳時代～平安時代頃の遺構と把握している。

溝SD201

A区で確認された幅1～1.6m、深さ0.3～0.5m、検出長約34mの調査区を斜めに横断する溝で、大半が從前建物の基礎抜き取り工事によって失われ、北端部、西端部、島状に残された部分で認められる。溝内の堆積状況を観察すると、自然の堆積作用で徐々に埋没していったことが判る。堆積土内からは古墳時代後期～飛鳥時代頃の土器・土錐が出土している。

溝SD202

A区の島状に残された部分で確認した長さ1.2m、幅0.2m、深さ0.05mほどの浅い溝である。土器等は出土しなかった。

溝SD203

B区中央と北端で検出した溝で、途中を基礎掘削で削られている。最大残存長6m、幅0.5～0.7m、深さ0.25mほどで南北に伸び、堆積土は、上層は黒色粘質土、下層は暗灰色系シルト～砂質土である。土師器の細片が出土した。

土坑SK201

A区北壁部分で僅かに残っていた遺構面で検出したが、北端のごく一部が残存しているに過ぎない。残存径1.2m、深さ0.4mある。遺物は出土しなかった。

土坑SK202

A区西端付近で検出したが、基礎工事の際にほとんど削られ、西端部分が残存するのみである。残存部の径は1.3m、深さ0.7mである。上層は湯黒色混疊シルト、下層は灰黄色混疊シルトが堆積する。土師器の細片が出土した。

土坑SK203

A区西壁で確認し、最大径1.5m、深さ0.75mを測るが、調査区外に延びているため、正確な形状、規模は不明である。埋土は上層が黒色シルト、下層は灰黒色シルトが堆積する。土師器、須恵器が小片で出土した。

土坑SK204

A区南半部で確認した長軸方向1m、短軸方向0.7m、深さ0.5mの楕円形の土坑で、すり鉢状に掘られている。埋土からは古墳時代初め頃の土器が橙白色の粘土塊と共に出土した。

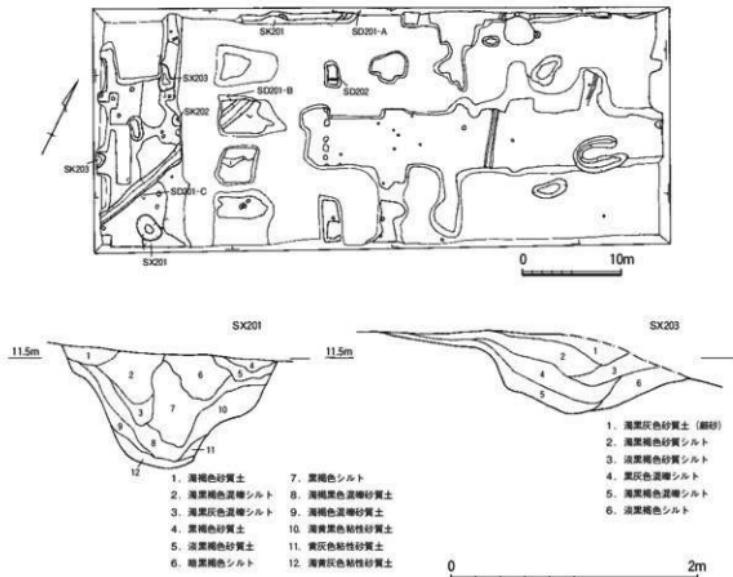
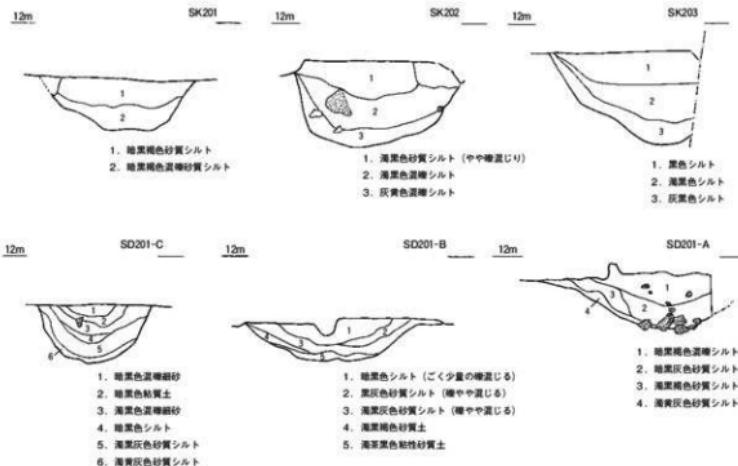


fig.17 第2遺構面土坑・溝・不明遺構断面図

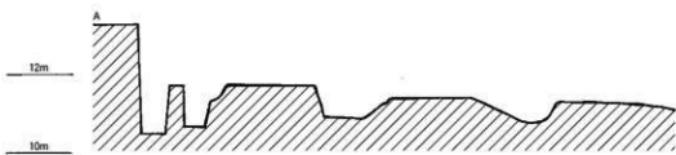
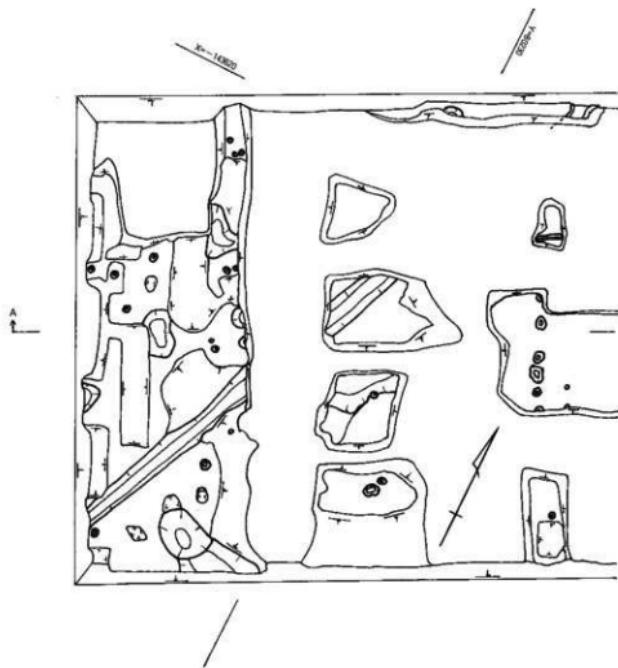
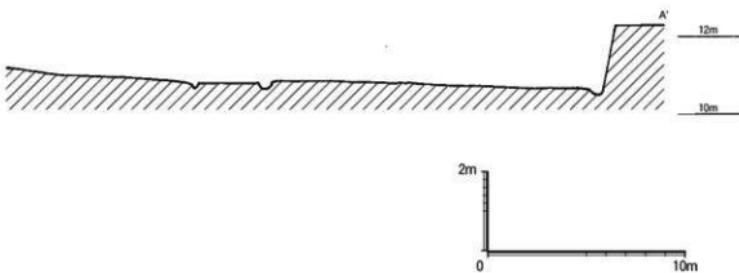
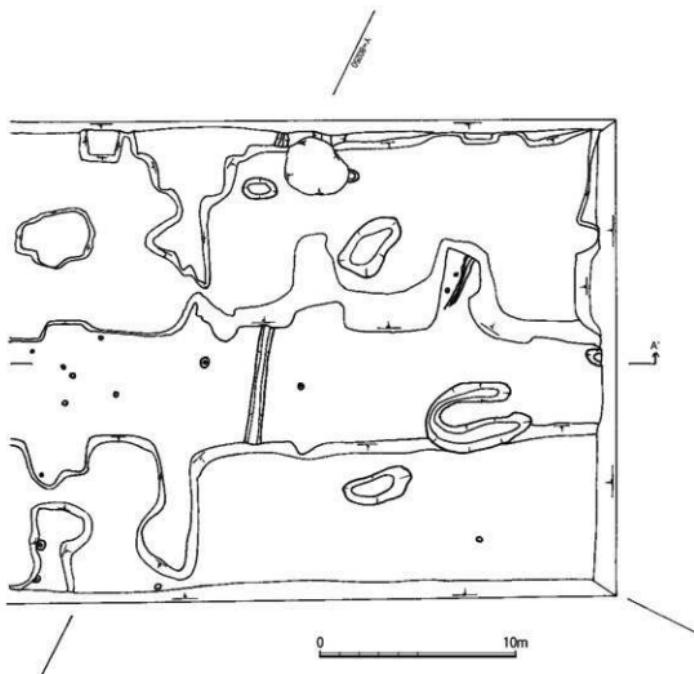


fig.18 第2遺構面平・立面図



土坑SK205

B区北西部で検出した土坑で、既存建物基礎抜き取り穴の底で確認したため、上層部分は相当削られている。長軸方向1.8m、短軸方向1.1m、深さ0.35mの楕円形の土坑で、黒褐色～灰褐色混疊シルトが堆積する。土器類は出土しなかった。

土坑SK206

B区北西部で確認した土坑であるが、後世の攪乱が著しく、東端部が残されているに過ぎない。残存径85cm、深さ0.2mを測る。灰褐色～灰黒色混疊シルトが堆積する。

土坑SK207

B区東端に位置し、遺構の大半が調査区外に外れる。土坑と思われるが正確な形状は不明である。最大径1m、深さ0.3mである。埋土からは土師器片が出土した。

不明遺構SX201

幅1.7m、深さ1m、検出長約4mの西側がすり鉢状に深く、東側が浅い不規則な形の落ち込みである。埋土の堆積状況を観察すると、最初は徐々に埋没し、半ば埋まった段階で人為的に埋めたことが判る。遺構内から土器は出土しなかった。

不明遺構SX202、SX203

これらは、第2遺構面である褐黄色混疊シルト面に、黒褐色混疊シルト～砂質シルトが互層になって堆積する。平面プランが長さ25～3mの不整形であり、深さも一様でないため、洪水の際に溢流した堆積物が窪みに溜ったものと判断される。堆積土内からは土師器の小破片が出土した。

不明遺構SX204

柱列SP218～222の間で検出され、長さ1m、幅約0.8m、深さ0.1m程度の浅い落ち込みである。用途は明らかでない。埋土内からは土師器、須恵器片が出土した。

不明遺構SX205

A区西半部の周囲を掘り取られて島状に残された部分で検出した。最大幅4m、深さ0.1m弱である。当初は堅穴住居跡の可能性を想定して掘削したが、掘形の肩が緩やかに下がってゆくことから、浅い窪地に上層の黒色混疊シルトが溜ったものと考えられる。遺物は出土しなかった。

不明遺構SX206

B区北壁付近で僅かに残っていた遺構面で検出したが大半が調査区外に及び、また調査区内の部分は後世の掘削で大きく崩されているため、正確な形状は不明である。断面形状から見て、土坑または溝の可能性が高い。幅2.2m、深さ0.6mを測る。

不明遺構SX207

B区中央部でC字形に湾曲する溝状の遺構で、幅1.7m、深さ1m、検出長約6m、北側の溝は深さ約0.2m、南側は0.9mを測る。遺構内から土師器の細片が出土した。この遺構の用途は不明である。

不明遺構SX208

B区南半部にあり、基礎抜き取りの掘削によって、40～50cmほど上層が削られている。検出長約3.5m、幅1.8m、深さ約0.4mある楕円形の遺構である。上層は黒色シルト、下層は暗褐色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

不明遺構SX209

B区北半部にあり、基礎抜き取りの掘削により、40cmほど上層が削られている。検出長約3.6m、幅2.3m、深さ約0.4mを測る不整形の遺構である。遺物は発見されなかった。

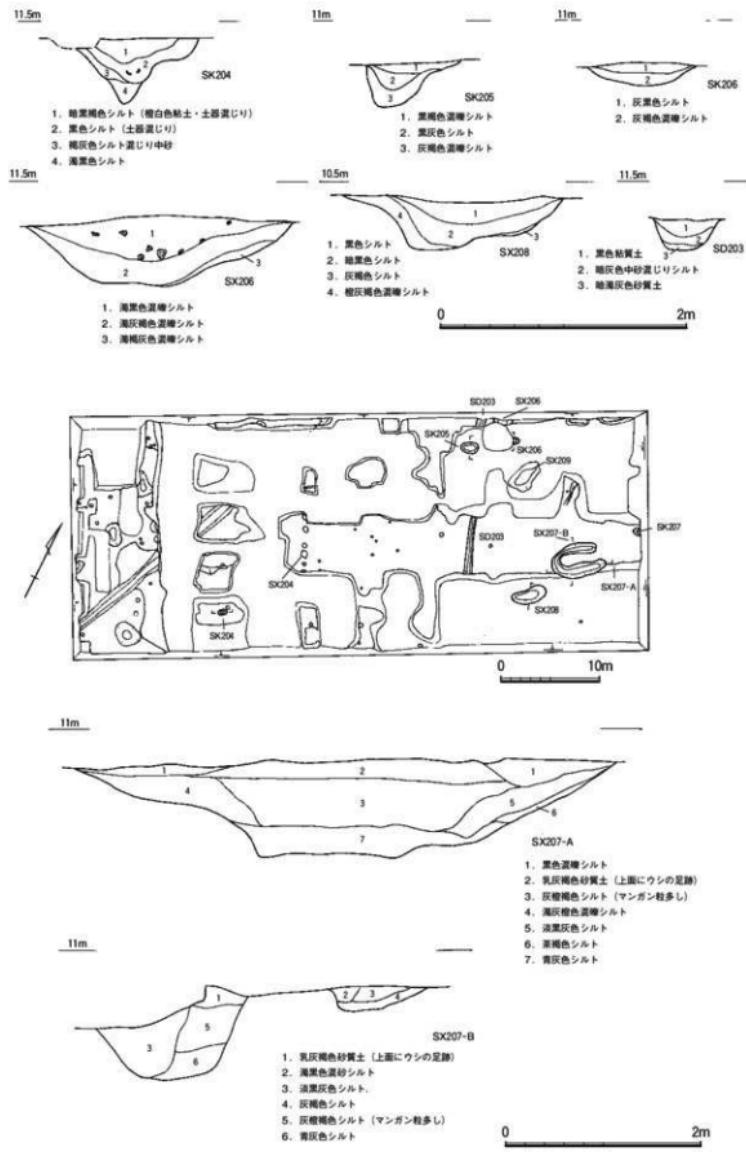


fig.19 第2遺構面土坑・溝・不明遺構断面図

柱列SP218~222

調査区ほぼ中央で確認された柱列で、直径0.2~0.3mの5基の柱穴が南北方向に並んでいる。その中には柱が埋め込まれていた痕跡が明瞭なものがある。埋土から土師器の小片が出土した。柱列の西側は後世の攪乱が著しいため柱穴が確認できず明確ではないが、掘立柱建物の可能性も考えられる。

ピット群

調査区北西端と中央部では複数のピットを確認した。特に北西端では稠密に検出しており、この付近から西側の調査区外にピット群は更に広がるものと推測される。

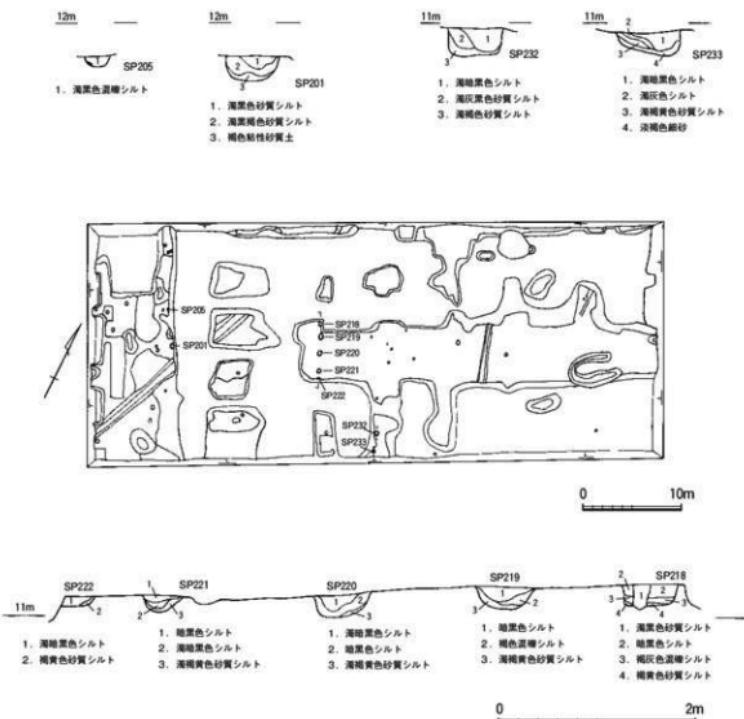


fig.20 第2構造柱列・ピット断面図

2. 遺物

(1) 遺構出土土器・陶器

1～4はA区の中世耕作土に掘りこまれた浅い溝から出土している。1は陶器擂鉢、2は白磁碗、3は須恵器の捏鉢で、4は須恵器の椀である。平安時代後期～戦国時代の遺物である。

5～9は第2遺構面の溝SD201から出土したもので、いずれも須恵器である。5、6は壺、7、8は高壺、9は長頸壺である。古墳時代後期～飛鳥時代のものである。10、11は第2遺構面の土坑SK204から出土したもので、10は甕形土器、11は壺形土器である。10は外面に叩き目、内面に刷毛目を残す。11は器表の磨滅が著しく、調整痕が明確でない。古墳時代初頭のものである。

(2) 中世耕作土出土土器・陶器

12～16は中世耕作土の暗（黒）褐灰色砂質シルトから出土した土器で、13は瓦器、他は須恵器である。12は椀で底部は回転糸切り未調整である。13は粘土紐を輪状に貼りつけた高台を持ち、底部内面に格子状のヘラ磨きを施す。14、15は捏鉢、16は甕と思われる。これらは平安時代末～鎌倉時代のものと判断される。

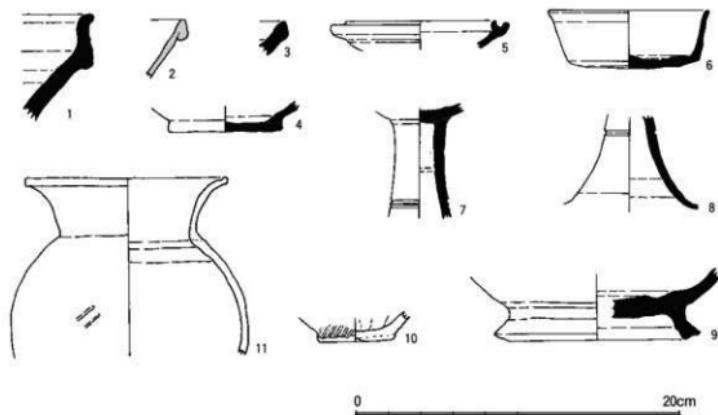


fig.21 遺構出土土器・陶器

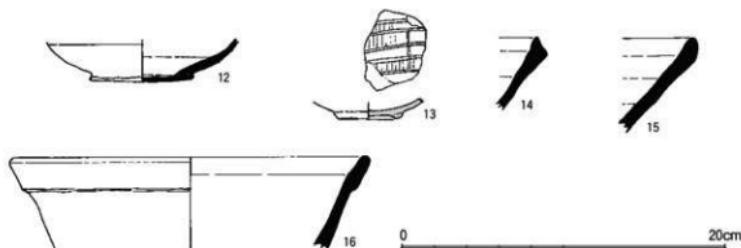


fig.22 中世耕作土出土土器・陶器

(3) 黒色混礫シルト（古墳時代～中世遺物包含層）出土土器・陶磁器

湿地状地形の堆積層である同層は最大50～60cmの厚さがあり、堆積している遺物も古墳時代初頭から鎌倉時代頃のものまでと時期幅を持つ。17は青磁碗で中国龍泉窯の製品、18は土師器鍋で外間に叩き目を持つ。21は瓦器碗底部内面にヘラ磨きを施す。いずれも平安時代末～鎌倉時代のものと考えられる。

22、23、24は黒色土器碗B類で断面三角形の貼り付け高台を持ち、内面はヘラ磨きを施す。

25は土師器皿で口縁端部がいわゆる「ての字形」を呈する。26も土師器皿で口縁部を屈曲させる。

これらは平安時代後期のものと考えられる。

19は土師器甕で頸部に指頭圧痕が残る、20は土師器瓶の把手部分、27は坏蓋、28は坏でいずれも須恵器である。奈良時代～平安時代前期の土器である。

29～33は須恵器で、29は坏蓋、30、31は坏、32は壺の底部～胴部、33は大型の甕の口縁部である。いずれも飛鳥時代～奈良時代頃のものと判断される。

34、35は弥生時代の壺形土器または甕形土器の底部と思われる。36は壺形土器、37～41は甕または鉢形土器の底部である。42は球状の坏部に欠失しているが外側に聞く脚部を持つ。43は頸部の内外面共に刷毛目を有し、外反する口縁端部を有する。36～43は古墳時代初頭の土器である。

(4) 土錘

土錘は漁網の末端に結縛または網に直接通される錘（おもり）であるが、今回の調査ではヴァラエティに富む土錘が発見された。図示したものすべて土師質である。44～54は小型の管状土錘で、棒状の心材に粘土を巻きつけ、成形した痕跡がよく残る。

55～60は棒状土錘で両端に通しの穴を穿てるタイプのものであるが、粘土塊を円柱状に成形しナデ調整を行った後、両端に紐通しの孔を開ける。この種類の土錘はほぼ真ん中で折損し出土する例が多く、孔の周縁部が摩滅しているものも見受けられる。59、60以外は欠損して半分しか残存していない。このタイプは古墳時代後期～奈良時代頃まで使用される。

61は管状土錘で、44～54に比べ大きく、丸い棒に粘土を付け成形したものである。表面の一部が摩滅しており、海底の砂礫上を引きずった痕跡が認められる。このタイプは弥生時代～古墳時代頃のものとされている。

土錘は管状・棒状のものなど形状・大きさが多種多様である。これまでの研究で、これらの差異は使用される網の種類によって異なるといわれている。例えば小形の管状土錘は刺網、投網、大形のものは地引網または底引網、棒状土錘は刺網に概ね使用された⁽¹⁾と考えられている。

44～49までは中世耕作土から、50、55、56、58、61は古墳時代～中世の遺物を含む黒色混礫シルト（湿地堆積層）から、54、57、60は古墳時代後期～飛鳥時代頃の溝であるSD201から、59は機械掘削時に、51～53は攪乱坑を清掃時に出土した。

註

(1) 真鍋篤行氏の考察を参考にした。

「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題」「瀬戸内歴史民俗資料館紀要第9号」1996

「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題（続）」「瀬戸内歴史民俗資料館紀要第10号」1997

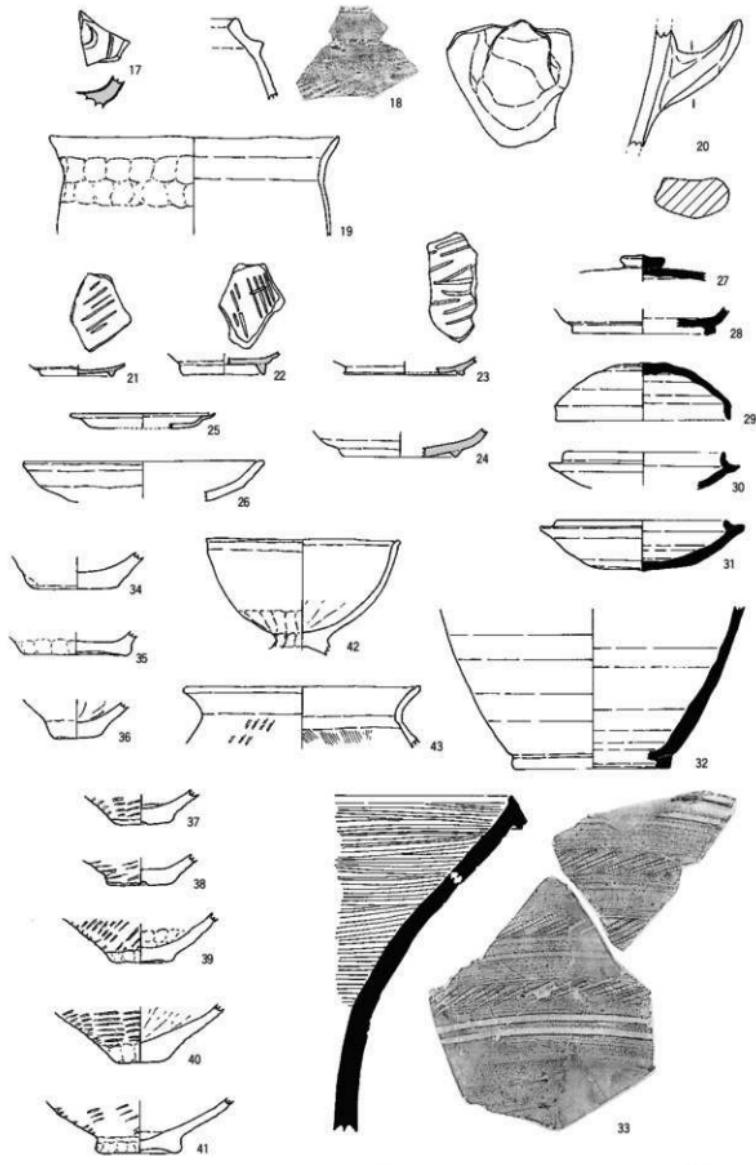


fig.23 黒色混疊シルト出土土器・陶磁器

0 20cm

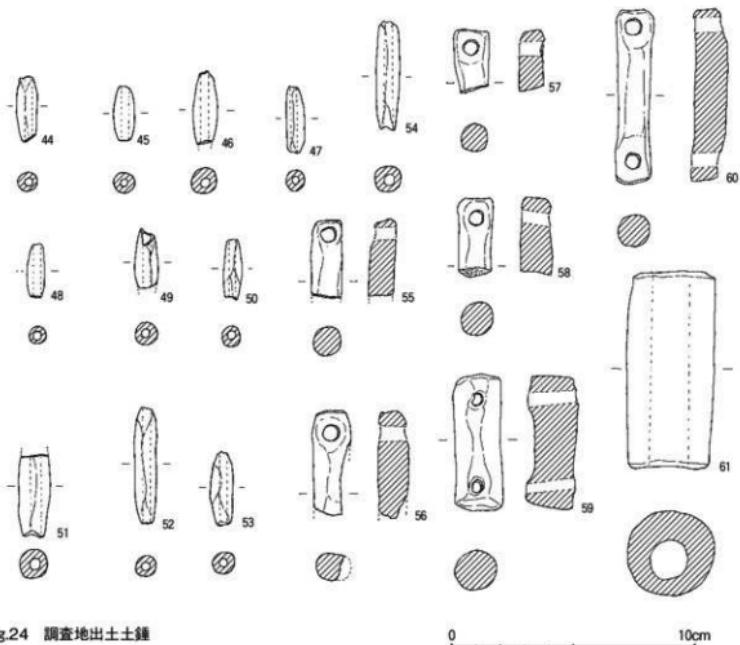


fig.24 調査地出土土錐

0 10cm

III.まとめ

今回の調査では後世の建物基礎による攪乱によって、遺構面の残っている部分は限定されていたが、2面の遺構面を確認し、第1遺構面で中世の耕作関連の溝、第2遺構面で古墳時代～平安時代頃の溝・土坑・柱列・ピット等を検出した。

周辺の調査データを参照しながら、今回検出された遺構の分布状況を観ると、調査区の西から東に向かって遺構の密度が低くなり、それに対応して湿地状の堆積土と判断される黒色混疊シルトが東へ行くほど厚く堆積している。同層からの出土遺物は、古墳時代から中世にかけてのものが出土しており、この層が長い年月の経過を経て堆積していくことがこの点から判かる。

調査地の東端部付近では、第2遺構検出面である褐黄色混疊シルト面に湿地層から踏み込まれたウシの足跡が無数に見つかっており、湿地付近に生えた草を食みに来ている（あるいは放されている）複数のウシの姿を想定することも可能であろう。

調査区の北西部には、後世の攪乱で遺構面が失われているものの、複数のピットが確認されており、これらは調査区外に延びていることから、この方向に居住地が拡がっていると考えられる。

また第2遺構検出面で検出された、調査区西半分を斜めに横断する溝SD201は、堆積土中に飛鳥時代頃の土器を包含している。この溝は灌漑用、集落の排水用等の機能が想定されるが、後者ならば、この当時の集落域の境界域に水捌け用の排水路を設けた可能性も指摘される。

以上の点から、当該地周辺は日暮遺跡の縁辺部の状況を呈している可能性が考えられる。

写真図版



1. A区遠景（南西から）



2. B区遠景（南から）

写真図版2



1. A区第1遺構面溝全景（南から）



2. A区第2遺構面溝全景（東から）



1. A区柱列SP218～222 (北から)



2. A区溝SD201全景 (南西から)

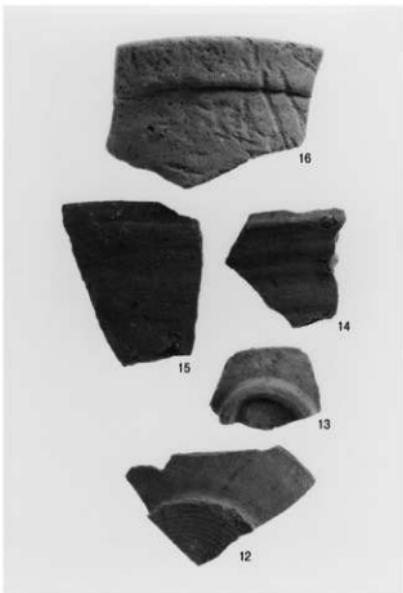
写真図版4



1. B区第2遺構面全景（西から）



2. B区第2遺構面全景（東から）



1. 中世耕作土出土土器・陶器



2. 遺構出土土器 (1)

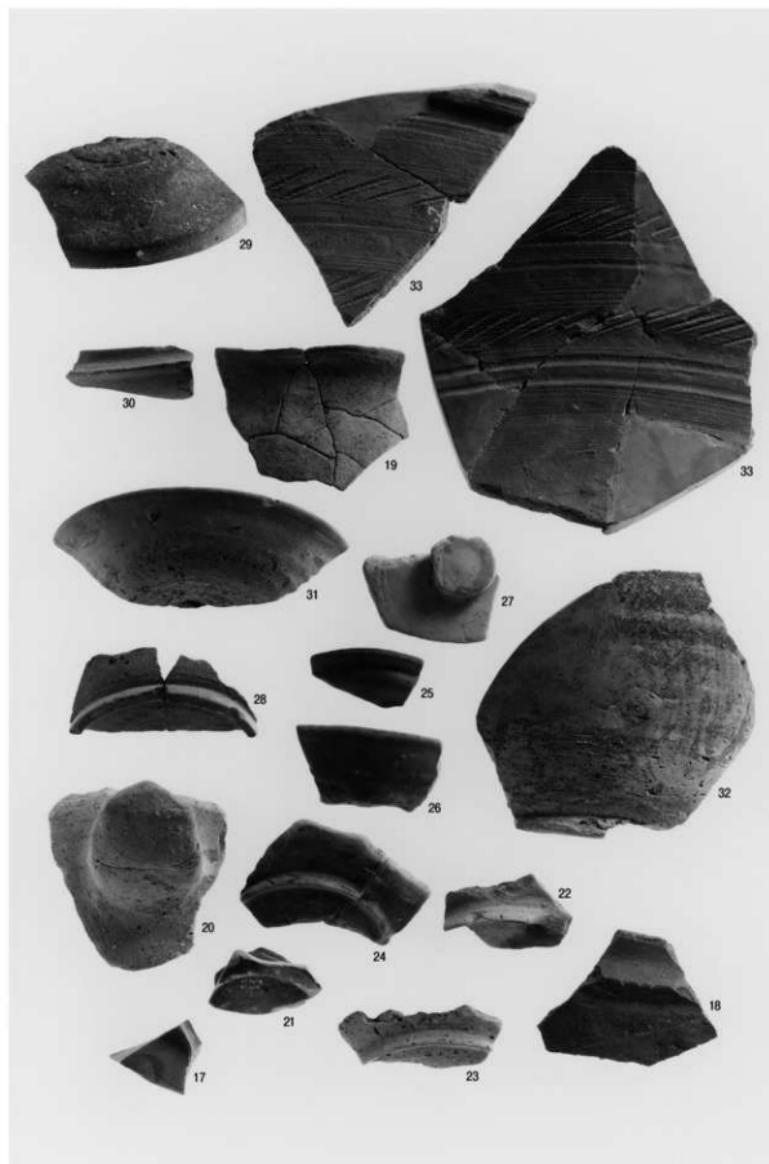


3. 遺構出土土器 (2)

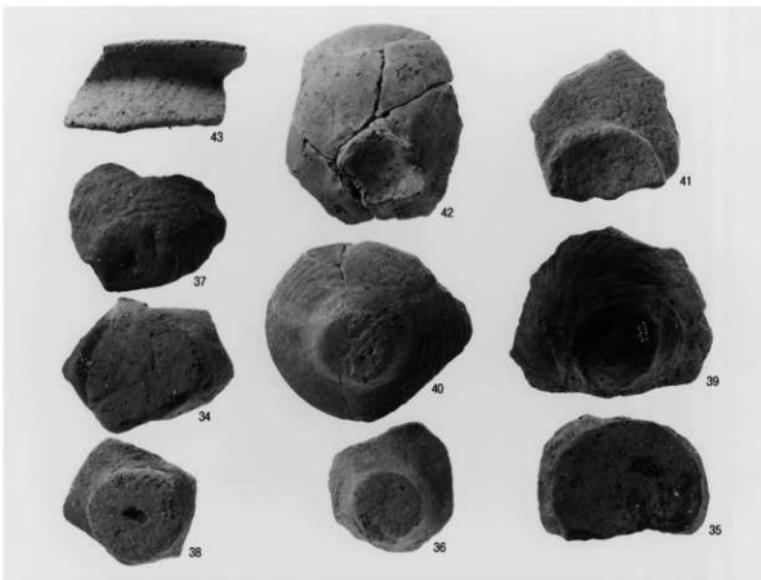


4. 遺構出土土器・陶器

写真図版 6



1. 黒色混礫シルト出土土器・陶磁器



1. 黒色混礫シルト出土土器



2. 調査地出土土錘

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひぐれいせき だい39じちょうさ まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ						
書 名	日暮遺跡 第39次調査 埋蔵文化財発掘調査報告書						
調 書 名							
卷 次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編 著 者 名	谷 正俊						
編 著 機 間	神戸市教育委員会						
所 在 地	神戸市中央区加納町6丁目5番1号 Tel 078-322-5799						
発行年月日	西暦2016年(平成28年)2月29日						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)
		市町村名	道路番号				
日暮遺跡	兵庫県神戸市中央区筒井町 2丁目29-1他	28110	3-28	34° 42° 08"	135° 12° 34"	20140616 ~20140829	1475 (延べ1725)
	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
	集落遺跡	古墳時代初頭	土坑	庄内式併行期の土器			
		飛鳥～平安時代	土坑・溝・柱穴	飛鳥時代～平安時代の土師器・須恵器・土鍬			
		中世(室町時代)	耕作関連の溝	鎌倉時代～室町時代の土師器・須恵器			
要 約	<p>日暮遺跡は六甲山系の南側の中央区に位置する。調査地は現在の海岸線からは約800m離れているが、当時の海岸線は更に近かったと想定される。今回の調査では後世の建物基礎による搅乱によって、遺構面の残っている部分は限定されていたが、2面の遺構面を確認し、第1遺構面で中世(室町時代頃)の耕作関連の溝、第2遺構面で古墳時代～平安時代頃の溝・土坑・柱列・ピット等を検出した。また各種土鍬等の漁具が出土し、この遺跡が海との関わりが深い人々の集落でもあることも指摘される。</p> <p>周辺の調査データを参照しながら、今回検出された遺構の分布状況を観ると、調査区の西から東に向かって遺構の密度が低くなり、湿地状の堆積土と判断される黒色泥炭シルトが厚く堆積している。このことから、当該地周辺が日暮遺跡の縁辺部の状況を呈している可能性が考えられる。</p>						

日暮遺跡 第39次調査
埋蔵文化財発掘調査報告書

2016.2.29

発 行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-5799

印 刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町1-1
TEL 078-371-7000